

三筋町界隈

斎藤茂吉

青空文庫

この追憶隨筆は明治二十九年を起点とする四、五年に当るから、
 日清戦役が済んで遼東還附（りやうとうかんぶ）に関する問題が囂（かまびす）しく、また、
 東北三陸の大海嘯（だいかいしやう）があり、足尾銅山鉍毒事件があり、文壇で
 は、森鷗外の『めさまし草』、与謝野鉄幹（よさのてつかん）の『東西南北』が出た
 ころ、露伴の「雲の袖（そで）」、紅葉（こうよう）の「多情多恨」、柳浪（りゆうろう）の
 「今戸心中（いまどしんじゆう）」あたりが書かれた頃に当るはずである。東京に
 鉄道馬車が始めて出来て、浅草観音の境内には砂がき婆さん（ばあ）の
 いたころである。この砂がき婆さんは一目眇（すがめ）の小さな嫗（おうな）であつた

が、五、六種の色の粉末を袋に持っていて人だかりの前で、祐ゆうて
天和んおしょう尚だの、信田しのだの森だの、安珍清姫だの、観世音靈驗記だ
のを、物語をしながら上下左右自由自在に絵を描いて行く、白びやっ
狐こなどは白い粉で尾のあたりからかいて、赤い舌などもちよつ
と見せ、しまいに黒い粉で眼を点ずる、不動明王の背負う火焰かえんな
どは、真紅な粉で盛りあげながら描くといったような具合で、少
年の私は観世音に詣もずることに其処を立去りかねていたものであ
る。その媼もいつのまにか見えなくなった、何時いつごろどういう病
気で亡くなったか知る由もなく、また媼の芸当あとつぎの後継もいず、
類似のわざをする者も出ずにしまったから、あれはあれで絶えた
ことになる。その頃助手のようなものは一人も連れて来ずに、い

つも媼ひとりでやって来ていた。またその粉末も砂がきとはいえ、砂でなくて^{うどんこ}餛飩粉か何かであつたのかも知れず、それにも一種の技術があつて万遍なく色の交るように^{こしら}拵えてあつたのかも知れないが、実際どういふものであつたか私にはよく分からぬ。また現在ああいうものが復興するにせよ、時代には敵^{かな}わぬだろうから、あの成行きはあれはあれで好^よかつたというものである。

鉄道馬車も丁度そのころ出来た。^{くらまえ}蔵前どおりを鉄道馬車が通るといふので、女中に連れられて見に行つたことがある。目隠しをした二頭の馬が走つてゆくのは、レールの上を動く車台を引くので車房には客が乗っている。私が郷里で見た開化絵を^ま目のあたり見るような氣持であつたが、そのころまでは東京にもレールの

上を走る馬車はなかったものである。この馬車は電車の出来るまで続いたわけである。電車の出来たてに犬が轢ひかれたり、つるみかけている猫が轢ひかれたりした光景をよく見たものであるが、鉄道馬車の場合にはそんな際きわどい事故は起らぬのであった。

二

そういうわけで、私は数えどし十五のとき、郷里上かみノ山やまの小学校を卒おえ、陰暦の七月十七日、つまり盆の十七日の午前一時ごろ父に連れられて家を出た。父は大正十二年に七十三歳で歿ぼつしたから、逆算してみるに明治二十九年にはまだ四十六歳のさかりであ

る。しかし父は若い時分ひどく働いたためもう腰が屈まがっていた。二人は徒歩で山形あたりはまだ暁の暗いうちに過ぎ、それから関山越えをした。その朝山形を出はずれてから持っていた提ちようちん灯を消したように憶おもえている。

関山峠はもうそのころは立派な街かいどう道でちつとも難渋しないけれど、峠の分水嶺を越えるころから私の足は疲れて来て歩行が捗はかどらない。広瀬川の上流に沿うて下るのだが、幾たびも幾たびも休んだ、父はそういう時には私に怪談をする。それは多く狐きつねを材料にしたもので父の実験したものか、または村の誰彼が実験したもののようにして話すので、ただの昔話でないように受取ることもある。しかしその怪談の中にはもう話してもらったのもあるし

足の疲労の方が勝つものだから、だんだん利目ききめがなくなつて来る
というような具合であつた。ところがあたかもそのとき騎兵隊の
演習戦があつた。卒は黄の肋骨ろつこつのついた軍服でズボンには黄の
筋が入っており、士官は胸に黒い肋骨のある軍服でズボンには赤
い筋が入っている。それを見たとき疲労も何も忘れてしまった。
私は日清戦争の錦絵にしきえは見ていても本物を見るのはその時が初め
てであつた。

一隊は広瀬川の此岸しがんにおり、敵らしい一隊は広瀬川の対岸の山
かげあたりにいる。戦鬪が近づくとき当方隊の一部は馬から下りて
広瀬川の岸に散開して鉄砲を打ちかけた。そうすると向うからも
鉄砲の音が聞こえてくる。その音は私には何ともいえぬ緊張した

音である。暫らく鉄砲を打っていたかとおもうと、当方の一隊はことごと尽く拔劍し橋を渡つて突撃した。父も私もこういう光景を見るのは生れてからはじめてであつた。私の元氣はこれを見たので回復して日の暮れに作さくなみ並温泉に著いた。その日の行程十五里ほどである。

翌日仙台に著いて一泊し、東北での城下仙台に目のあたり来たことを感じ、旅館では最中もなかという菓子をはじめて食つた。当時長兄が一年志願兵で第二師団に入営していたのに面会に行ったが機動演習で留守であつた。そこで一日置いて朝仙台を発し、夜になつて東京の上野駅に著いた。そして、世の中にこんな明るい夜が実際にあるものだろうかとおもつた。数年を経て不夜城と言う言

葉を覚えたが、その時も上野駅にはじめて著いたときの印象を逆におもい出したものであつた。そのころの燈火は電燈よりも石油の洋燈ランプが多かつたはずなのにそんなに明るく感じたものである。

それから父と二人は二人乗の人力車じんりきしゃで浅草区東三筋町五十

四番地に行つたが、その間の町は上野駅のように明るくはなかつた。やはり上ノ山ぐらいの暗いところが幾処もあつて、少年の私の脳裡のうりには種々雑多な思いが流れていたはずである。さてその五十四番地には、養父斎藤紀一先生が浅草医院というのを開いていたので、其処そこにたどりついたのである。

医院はまだ宵の口なので、大きなランプが部屋に吊りさげられてあつて光は皎々こうこうと輝いていた。客間は八畳ぐらいだが紅い毛あかも

氈^{うせん}などが敷いてあつて万事が別な世界である。また、最中という菓子も毎日のように食うことが出来る。

ここに書いた陰暦七月十七日は陽暦にすれば何日になるだろうかと思つて調べたことがある。それに拠^よると旧の七月十七日は新の八月二十五日になるから、二十八日か二十九日かに東京に著いたことになる。

三

養父紀一先生はそのころ紀一郎といったが、紀一という文字は非常によいものだと言つて漢学の出来る患家の一人がいったとかで紀一

と改めたのである。父の開業していた、その浅草医院は、大学の先生の見離した病人が本復ほんぶくしたなどという例も幾つかあつて、父は浅草区内で流行医の一人になっていた。そして一つの専門に限局せずに、何でもやった。内科は無論、外科もやれば婦人科もやる、小児科もやれば耳鼻科もやるというので、夜半に引きつけた子供の患者などは幾たりも来た。そういう時には父は寝巻に纏ど袍てらのままで診察をする。私もそういう時には物珍しそうに起きて来て見ていると、ちよつとした手当て今まで人事不省になっていた孩がいじ児が泣き出す、もうこれでよいなどというと、母親が感謝して帰るというようなことは幾度となくあつた。硝子ガラスを踏みつけた男が夜半に治を乞こいに来て、それがなかなか除かれずに難儀した

ことなどもあった。咽のどに魚の骨を刺して来たのを妙な毛で作った器械で除いてやって患者の老人が涙をこぼして喜んだことなどもある。まだ喉頭鏡こうとうきようなどの発明がなかった頃であるから、余計に感謝されたわけである。

今は医育機関が完備して、帝国大学の医学部か単科医科大学で医者を養成し、専門学校でさえもう低級だと論ずる向もあるくらゐであるが、当時は内務省で医術開業試験を行ってそれに及第すれば医者になれたものである。

そこで多くの青年が地方から上京して開業医のところで雑役をしながら医学の勉強をする。もし都合がつけば当時唯一の便利な医学校といってもよかった済生学舎に通って修学する。それが出

来なければ基礎医学だけは独学をしてその前期の試験に合格すれば、今度は代診という格になって、實際患者の診察に従事しつつ、その済生学舎に通うというようなわけで、とにかく勉強次第で早くも医者になれるし、とうとう医者になりはぐったというのも出来ていた。

当時の医学書生は、服装でも何かじやらじやらしていて、口には女のことを断たず、山田良叔先生の『蘭氏生理学生殖篇』を暗記などばかりしているというのだから、硬派の連中からは軽蔑けいべつの眼を以て見られた向もあつたとおもうが、済生学舎の長谷川泰翁の人格がいつ知らず書生にも薫染していたものと見え、ここの書生からおもしろい人物が時々出た。

ある時、陸軍系統といわれた成城学校の生徒の一隊が済生学舎を襲うということがあつて、うちの書生などにも檄げきぶん文のようなものが廻まわつて来たことがあつた。すると、うちの書生が二人ばかり棍こんぼう棒か何かを持って集まつて行つた。うちの書生の一人に堀というのがいて顔面神経の痲痺まひしていた男であつたが、その男に私も附いて行つたことがある。すると切きりどおし通とおし一帯の路地路地ろじろじには済生学舎の書生で一ぱいになっていた。彼らは成城学校の生徒を逆撃しようと待ちかまえているところであつた。これは本富士署あたりの警戒のために未遂に終つたが、当時の医学書生というものの中には本質までじやらじやらでない者のいたことを証明しているのである。

医学書生のやる学問は常に肉体に関することだから、どうしても全体の風貌ふうぼうが覚官的になつて来るとおもうが、長谷川翁の晩年は仏学すなわ即ち仏教經典の方に凝つたなどはなかなか面白いことでもある、西洋学の東漸中、医学がその先驅をなした点からでも、医学書生の何処どこかに西洋的なところがあつたのかも知れない。著き流ながしのじやらじやらと、吉原遊里よしわらの出入などということも、看み方かたによつては西洋的な分子の変型であるかも知れないから、文化史家がもし細かく本質に立入つて調べるような場合に、当時の医学書生の生活というものは興味ある対象ではなからうかとおもうのである。

また、医学の書生の中にも毫すこしも医学の勉強をせず、当時雑書を

背負つて廻つていた貸本屋の手から浪なみろく六もの、涙るいこう香もの等を
借りて朝夕そればかり読んでいるというのもいた。私が少年にし
て露伴翁の「靄あいごし護精舎ようじや雑筆」などに取りつき得たのは、そう
いう医院書生の変り種の感化であつた。

そういう入りかわり立ちかわり来る書生を父は大概大目に見て、
伸びるものは伸ばしても行つた。その書生名簿録も今は焼けて知
るよしもないが、既に病歿したものが幾人かいて、私の上京当時
撮つた写真にそのころの名残を辛うじてとどめるに過ぎない。

四

その頃、蔵前に煙突の太く高いのが一本立っていて、私は何処どこを歩いていても、大体その煙突を目当めあてにして帰つて来た。この煙突は間もなく二本になったが、一本の時にも煙を吐きながら突立っているさまは如何いかにも雄大で私はそれまでかく雄大なものを見たことがなかった。神田かんだを歩いていても下谷したやを歩いていても、家のかげになつて見えない煙突が、少し場処をかえると見えて来る。それを目当に歩いて来て、よほど大きくなつた煙突を見ると心がほつとしたものである。上京したての少年にとってはこの煙突はただ突立っている無生物ではなかつたようである。

私が東京に来て、三筋町のほかにはやく覚えたのは本所ほんじよ緑町であつた。その四丁目かに黒川重平という質屋があつて、其処の

二階に私の村の寺の住職佐原 りゅうおう 応和尚が間借をして本山即ち

近江番場の蓮華寺れんげのために奮闘していたものである。私は地図を

書いてもらつて徒歩で其処たずに訪ねて行つた。二階の六畳一間で其

処に中林梧竹翁ごちくの額が掛かつていて、そこから富士山が見える。

私は富士山をそのときはじめて見た。夏の富士で雲なども一しよであつたが、現実に富士山を見たときの少年の眼は一期を画したということになった。この画期ということは何も美麗な女体を見た時ばかりではない。山水といえども同じことである。

郷里の上ノ山の小学校には時々郡長が参観に來た。江嘉氏であつたとおもうが鹿児島出身の老翁で、英吉利軍艦イギリスに談判たばこに行つた一行の一人であつた。校長に案内されて郡長は紙巻の煙草をふか

しながら通る。ホールで遊んでいる児童が立つて敬礼をする。そのあとに煙草の煙の香かおりが残る。煙は何ともいえぬ好よい香かおりで香ばしいような酸っぱいような甘いような一種のかおりである。少年の私はいつもその香に淡い執著を持つようになっていた。しかるに東京に来て見ると、うちの代診も書生どももかつて郡長の行過ぎたあとに残ったような香のする煙草を不断吸っている。ひそかにそれを見ると皆舶来の煙草である。そしてパイレートというの中には美人だの万国の兵士だのの附録絵がついているので私もそれを集めるために秘ひそかに煙草を買うことがある。煙草ははじめは書生にくれていたが、時には火をつけてその煙を嗅かぐことがある。もともと煙の香に一種の係けいれん恋を持っていたのだから中学の三年

ごろから、秘かに煙草喫むことをおぼえて、一年ぐらい偶々《たまに》に喫んでいたが、ある動機で禁煙して、第一高等学校の三年のときまた喫みはじめた。その明治三十七年から大正九年に至るまでずっと喫煙をして随分の分量喫^すつた。巢鴨^{すがも}病院に勤務していた時、呉^{くれ}院長は、患者に煙草を喫ませないのだから職員も喫つてはならぬと命令したもので、私などは隠れて便所の中で喫んだ。それくらい好きな煙草を長崎にいたときやめて、佳^よい煙草も安く喫める欧羅巴^{ヨーロッパ}にいたときにも決して口に銜^{くわ}えることすらしなかった。一旦銜えたら離れた恋人を二たび抱くようなものだと悟つて決してそれをせずにした。しかしその煙を嗅ぐことは今でも好きで、少年のころパイレートの煙に係恋をおぼえたのと

ちつとも変りはないようである。

かつて巢鴨病院の患者の具合を見てみると、紙を巻いて煙草のようなつもりになって喫んでいるのもあり、煙管きせるを持つているものは、車前草などを乾おおぼこしてそれをつめて喫むものもいる。その態ていは何か哀れで為方しかたがなかったものである。また徳川時代に一時禁煙令の出たことがあった。或日商人某が柳原の通をゆくと一人の乞丐こじきが薦こもの中に隠れて煙草を喫んでいるのを瞥べっけん見して、この禁煙令はいまに破れると見越みこしをつけて煙管を買占めたという実話がある。昼食のとき私はこの実例を持出して笑談まじりに呉院長を説得したことがあった。

開業試験が近くなると、父は氣を利きかして代診や書生に業を休

ませ勉強の時間を与える。しかし父のいない時などには部屋に皆どもが集つて喧囂けんこうを極めてゐる。中途からの話で前半がよく分からぬけれども何か吉原を材料にして話をしてゐる。遊女から振られた腹癒はらいせに箆たんす笥くその中に糞くそを入れて来たことなどを実験談のようにして話しているが、まだ、少年の私がいても毫すこしも邪魔にはならぬらしい。その夜更よふけわたつたころ書生の二、三は戸あを開けて外に出て行く。しかし父はそういうことを大目に見ていた。

明治三十年ごろ『中学新誌』という雑誌が出た。これはやはり開成中学にも教きょう鞭うべんをとつた天野という先生が編へん輯しゅうしていたが、その中に、幸田露伴先生の文章が載つたことがある。数項あつたがその一つに、「鶏の若きが闘ひては勝ち闘ひては勝つと

きには、勝つといふことを知りて負くるといふことを知らざるま
ま、堪へがたきほどの痛きめにあひても猶なおよく忍びて、終ついに強敵
にも勝つものなり。また若きより屢 《しばしば》 闘ひてしばし
ば負けたるものは、負けぐせつきて、痛を忍び勇みをなすといふ
ことを知らず、まことはおのが力より劣れるほどの敵にあひても
勝つことを得ざるものなり。鶏にても負けぐせつきたるをば、下し
たどり鳥といひて世は甚だ疎む。人の負けぐせつきたるをば如何いかで愛め
よろこで悦ばむ」というのがあつて、私はこれをノオトに取つて置いた
ことがある。この文は普通道德家例えば『益軒十訓』などの文と
違い実世間的な教訓を織りまぜたものであつて、いつしか少年の
私の心に沁しみ込んで行つた。

吉原遊里の話も、ピンヘッド、ゴールデンバット、パイレーットの煙草の香も、負ぐせのついた若鶏の話も、陸奥^{むつ}から出京した少年の心には同様の力を以て働きかけたものに相違ない。今はもはや追憶だから当にならぬよう存外当っている点がある。

五

私が東京に来て、連れて来た父がまだ家郷に帰らぬうちから、私は東京語の幾つかを教わった。醤油^{しょうゆ}のことをムラサキという。餅^{もち}のことをオカチンという。雪隠^{せつちん}のことをハバカリという。そういうことを私は素直に受納^{うけい}れて今後東京弁を心掛けようと努め

たのであつた。

私が開成中学校に入学して、その時の漢文は『日本外史』であつたから、当てられると私は苦もなく読んで除^のける。『日本外史』などは既に郷里で一とおり読んで来ているから、ほかの生徒が難^なんじゅう^{んじゅう} 渋^渋しているのを見るとむしろおかしいくらいであつた。しかるに私が『日本外史』を読むと皆で一度に笑う。先生は磯部武者五郎という先生であつたがお腹^{なか}をかかえて笑う。私は何のために笑われるかちつとも分からぬが、これは私の素読は抑揚頓挫^{とんざ}ないモノトーンなものに加うるに余り早過ぎて分からぬいうためであつた。爾^{じらい}来四十年いくら東京弁になろうとしても東京弁になり得ず、鼻にかかるずうずう弁で私の生は終わることになる。

私は東京に来て蕎麦そばの種たねもの物をはじめて食った。ある日母は私を蕎麦屋に連れて行つて、玉子とじという蕎麦を食べさせた。私は仙台の旅舎で最中という菓子を食べて感動したごとく、世の中にこんな旨いものがあるだろうかと思つたが、程ほど経て、てんぷら、おやこ、ごもく、おかめなどという種蕎麦のあることを知つて、誠に驚かざることを得なかつた。

それから佐竹の通りには馬肉屋が数軒あつたが、私はそういう処ところに入ることを知らなかつた。ただ市いちむら村座の向側に小さい馬肉の煮込を食わせるところがあり、その煮方には一種の骨こつがあつて余所よそでは味あじえない味を出していた。うちの書生の説つばきに椿油か何かを入れるのではなからうかというのであつたが、よくは分からな

い。

夜十時過ぎになると書生も代診も交つて籤くじを引いて当つた者が東三筋町から和泉町いずみのその馬肉屋まで買いに来る。今どきの少年は馬肉は軽蔑して食わぬし、ビステキなども上等のを食いたがるけれども、馬肉を食わぬからといって皆賢かしこくなるというわけではない。また、大正十年の夏、私は信州富士見に転地していたとき、あの近在に或る神社の祭礼があつて、そこでやはり馬肉の煮込を食へたことがある。その味は市村座の向側の馬肉屋の煮込そっくりであつたから、煮込む骨に共通の点があつたのかも知れない。郷里を立つとき祖母は私に僅わずかばかりの小遣こづかい銭せんをくれているに、東京には焼芋やきいもというものがある、腹が減つたらそれを食え。

そこで私は学校の帰りには、左衛門橋の袂たもとの焼芋屋によって五厘ずつ買った。そのころ五厘で焼芋三個くれたものである。

母は私を可哀がつて学校から帰るとかけ蕎麦を取ってくれた。もりかけが一銭二厘から一銭六厘になった頃で大概三つぐらいは食った。

また、夜おそくなると書生と牛飯とうがらしこというのを食いに行き行きした。一碗わん一銭五厘ぐらいで赤い唐辛子粉とうがらしこなどをかけて食べさせた。今でも浅草の観世音近くに屋台店が幾つもあるけれども、汁が甘くて駄目になった。その頃はあんなに甘くなかった。

私と同様出京して正則せいそく英語学校に通っていた従弟いとこが、ある日日本橋を歩いていて握にぎりずし鮓ずしの屋台に入り、三つばかり食ってか

ら、蝦蟇がまぐち口に二銭しかなくて苦しんだ話をしたことがある。その話を聞いて私は一切すしというものを食う気がしなかった。鰻うなぎ井んなども上等なもてなしの一つで、半分残すのが礼儀のような時代であつたところを思うと、養殖が盛になつたために吾われわれ々はありがたい世に生きているわけである。

六

そのころ奠都祭てんとというものがあつて式場は多分日比谷ひびやだったようにおもう。紅い袴はかまを穿いた少女の一群を見て非常に美しく思つたことがある。それから間もなく女学生が紅い袴を穿き、ついで

蝦茶えびちゃの袴がある期間流行して、どのくらい青年の心を牽ひつけたか知れぬが、そのころはまだそれが、なかった。

東三筋町に近い、鳥越町とりごえに渡辺省亭わたなべせい画伯が住んでおられ

て、令嬢は人力車でお茶の水の女学校に通った。その時は髪を桃も割もに結もつて蝦茶の袴は未だ穿すいていなかったから私はよくおぼ

えている。俳人渡辺水巴氏すいはは省亭画伯の令息で、正月のカルタ遊あそびなどにはよく来られたものである。もう夢のような追憶であるからおぼつかない点もあるが、水巴は俳人、茂吉は歌人となったわけである。

黒川真頼翁まよりも具合の悪いときには父の治療を受けた。晩年の真頼翁はもう頭の毛をつるつるに剃そつておられた。体が癢かゆくて困る

といわれてうちの代診の工夫で硫黄いおうの風呂ふろを立てたこともあり、最上もがみ高湯の湯花を用いたことなどもあった。いまだ少年であつた私が縦たとい翁と直接話を交かわすことが出来なくとも、一代の碩学せきがくのふうぼうふうぼうを覗のぞき見するだけでも大きい感化であつた。そのころの開業医と患家とのあいだには、そのような親しみもあり徳分もあつたものである。しかし父も精神科専門になつてからはそういう患家との親しみは失うせた。このことには実に微妙なる関係があつて、父は、「感謝せらるる医者」から「感謝せられざる医者」に転じたわけである。精神病医者というものは、患者は無論患者の家族からも感謝せられざる医者である。

私は東京に来て、浅草三筋町において春機発動期に入つた。当

時は映画などは無論なく、寄席にも芝居にも行かず、勸学の文にある、「書中女あり顔玉のごとし」などということが沁^しみ込んでいるのだから、今どきの少年の心理などよりはまだまだ刺戟^{しげき}も少く万事が単純素朴であつたのである。それでも目ざめかかったりビドウのゆらぎは生涯ついて廻るものと見えて、老境に入つた今でも引きつけられる対象としての異性はそのころのリビドウの連鎖のような気がしてならないのである。そのころ新堀^{しんぼり}を隔てた

えいきゆうちよう

栄久町の小学校に通う一人の少女があつた。間もなく卒業

したと見えて姿を見せなくなつたが、私は後年年不惑を過ぎミュンヘンの客舎でふとその少女の面影を偲^{しの}んだことがある。あるいは目前に私に対している少女にその再来なるものがいるかも知れ

ない。

新堀といえ、新堀にはそのころ舟が幾艘そとうも来て舫もやつてい
とがあつた。幸田露伴翁の「水の東京」に、「浅草文庫の旧跡の
下にはまた西に入るの小渠しょうきよあり、須賀町地先を経、一屈折し
て蔵前通りを過ぎ、二岐となる。其の北に入るものは所謂、
新堀にして、栄久町三筋町等に沿ひ、菊屋橋・合羽橋等の下
に至る。此一条の水路は甚だ狭隘きやうあいにして且つ甚だ不潔なれど
も、不潔物其他の運搬には重要な位置を占むること、其の不快
を極むるところの一路なるをも忌み厭ふに暇いとまあらずして渠身不相
応なる大船の数々出入するに徴して知るべし。且つ浅草区一帯の
地の卑湿にして燥かわき難きも、此の一水路によりて間接に乾燥せし

めらるること幾いくばく許なるを知らざれば、浅草区に取りては感謝すべき水路なりといふべし」とあるところである。まだ少年の私はパイレートという煙草を買つて、その中の美人の絵だけをとつて中味をこの堀の水に棄すてたことがあつた。新堀の名は三味線堀と共に私の記憶から逸し得ざるのもまた道理である。

七

その頃の浅草観世音境内には、日清役平壤戦のパノラマがあつて、これは実にいいものであつた。東北の山間などにいてはこういうものは決して見る事が出来ない私は子供心にも沁しみ々と

おもったものであつた。十銭の入場料といえはそのころ惜しいとおもわなければならぬが、パノラマの場内では望遠鏡などを貸してそれで見せたのだから如何いかにも念入であつた。師団司令部の将校等の立っている向うの方に、火災の煙が上つて天を焦がすところで、その煙がむくむく動くように見えていたものである。

このパノラマは上野公園には上野戦争がかいてあつたが、これは浅草公園のものほど度々たびたびは見ずにしまった。そのころ仲見世なかみせに勧工場かんこうばがあつて、ナポレオン一世、ビスマルク、ワシントン、モルトケ、ナポレオン三世というような写真を売っていた。これらの写真は、私が未だ郷里にいたとき、小学校の校長が東京土産に買つて来て児童に見せ見せたものであるから、私は小遣錢が

溜^たまると此処に来てその英雄の写真を買いあつめた。

そういう英雄豪傑の写真に交つて、ぽん太の写真が三、四種類あり、洗い髪で指を頬^{ほお}のところに当てたのもあれば、桃割に結つたのもあり、口紅の濃く影^{うづ}つているのもあつた。私は世には実に美しい女もいればいるものだと思い、それが折にふれて意識のうえに浮きあがつて来るのであつた。ぽん太はそのころ天下の名妓^{めいぎ}として名が高く、それから鹿島屋清兵衛さんに引かされるということ^{しき うわさ}で切りに噂に上つた頃の話である。

そのうち私は中学を卒業し、高等学校から大学に進んだころ、鹿島氏は本郷^{ほんごう}三丁目の交叉点^{こうさ}に近く住んでいるということを聞き、また写真屋を開業^{こうぎ}していて薬が爆発して火傷^{やけど}をしたというよ

うな記事が新聞に載り、その記事のうちに従属的に織交おりまぜられて初代ぼん太鹿島ゑ津子の名が見えていたことがあつた。また、父の経営した青山脳病院では毎月患者の慰安会というものを催し、次ぎから次と変つた芸人が出入したが、ある時鹿島ゑ津子さんがほかの芸人のあいまに踊を舞つたことがある。父がそのとき「なるほどまだいい女だねえ」などといつて、私は父の袖を引張つたことがある。私のつもりではそんな大きい声を出しなさるなというつもりであつた。遠くで細部はよく見えなかつたが人生を閲けみして来た味あじわいが美貌のうちに沈んでしまつて実に何ともいえぬ顔のようであつた。私が少年にして浅草で見た写真よりもまだまだ美しい、もっと切実な、奥ふかいものであつた。私は後にも前にも

ただ一度ぼん太を見たということになるのであるが、この注意も上京当時写真で見たぼん太の面影が視野の外に全くは脱逸していなかったためである。私はその時のことを「かなしかる初代ぼん太も古妻ふりづまの舞ふ行く春のよるのとしび」という一首に咏よんだ。私のごとき山水歌人には手馴てなれぬ材料であつたが、苦吟のすえに辛うじてこの一首にしたのであつた。散文の達者ならもつと余韻じょうじょう嫋々じょうじょうとあらわし得ると思うが、短歌では私の力量の、せい一ぱいであつた。また或る友人は、山水歌人の私が柄にも似ずいぼん太の歌などを作つたといったが、作歌動機の由縁を追究して行けば、遠く明治二十九年まで溯さかのぶることが出来るのである。歌は歌集『あらたま』の大正三年のところに収めてある。

それからずっと歳月が経^たつて、私の欧羅巴^{ヨーロッパ}から帰つて来た大正十四年になるが、火難の後の苦痛のいまだ疼^うずいているころであつたかとおもうが、友人の一人から手紙を貰^{もら}つた中に、「ほん太もとうとう亡くなりました」という文句があつた。そしてこの報道は恐らく新聞の報道に本づいたものであつたろうとおもうが、都下の新聞では先ず問題にするような問題にはしなかつたようである。それで私も知らずにいたし、その報道の切^{きりぬき}拔なども持つていない。恐らく極く小さく記事が載つたのではなかつただろうか。

昭和十年になつて、ふとぽん太のことを思いだし、それからそれと手を廻して友人の骨折によつてぽん太の墓のあるところをつ

きとめた。墓は現在多磨墓地にある。

昭和十一年の秋の彼岸ひがんに私は多磨墓地に行った。雨のしきりに降る日で事務所で調べるのに手間どったがついにたずね当てることが出来た。墓は多磨墓地第二区八側五〇番甲種で、墓石の裏には大正十四年八月一日二代清三郎建之と刻してある。この二代鹿島清三郎氏は目下小田原下河原四四番地に住まれているはずである。此ここ処に合葬せられている仏は、鹿島清兵衛。慶応二年生。死亡大正十二年十月十日。病名慢性腸カタル加答児。急津。明治十三年十一月二十日生。死亡大正十四年四月二十二日。病名肝臓腫瘍しゅよう。病名慢性気管支加答児。静江。明治四十年二月九日生。死亡昭和三十

年一月二十九日。病名腎臓炎。京子。明治四十年生。死亡大正十三年九月二十七日。病名脊髄^{せきずい}カリエス。云々である。

鹿島急津さんは即ち初代^{すなわ}ぼん太で、明治十三年生だから昭和十一年には五十七歳になるはずで、大正十四年四十六歳で歿^{ぼつ}したのである。ぼん太については、森鷗外の「百物語」に出ているが、あれはまだ二十前の初々^{ういうい}しい時のことであっただろう。誰か小説の大家が、晩年における急津さんの生活のデタイルスを叙写してくれるなら、必ず光りがやるところのある女性になるだろうと私は今でもおもっている。

そのころ東京には火事がしばしばあつて、今のように蒸気ポンプの音を聞いて火事を想像するのは違い、三つ番でも鳴るときなどは、家のまえを走ってゆく群衆の数だけでもたいしたものであつた。

私は東京に來たては、毎晩のように屋根のうえに上つて鎮火の鐘の鳴るまで火事を見ていたものである。寝てしまった後でも起き起きして物干台から瓦を伝わり其処の屋根瓦にかじりついて、冬の夜などにはぶるぶる震えながら見ていたものである。東京の火事は毎晩のように目前に異様の世界を現出せしめてくれるからであつた。

そういう具合にして私は吉原の大火も、本郷の大火も見た。吉原には大きい火事が数回あったので、その時から殆ど四十年を過ぎようとしている今日でも、紅い火焰と、天を焦がして一方へ靡なびいて行く煙とを目前におもい浮べる事が出来るほどである。時には書生や代診や女中なども交って見ている。「あ、今度はあっちへ移った」などというと、物のくずれる時のような音響が伝わってくる。同時に人の叫びごえが何か重苦しいもののように聞こえてくる。そのうち火勢が段々衰えて来て、たちのぼる煙の範囲も狭くなるころ、「もうおしまいだ」などといって書生らは屋根から降りて行っても私はしまいまで降りずにいたものである。こういう光景は、私の子どもらはもう知ることが出来ない。

このごろは、ナフタリンだの何のと、種々様々な駆虫剤が便利
 に手に入ることが出来るので、のみ 蚤なども殆どいなくなつたけれど
 も、そのころは蚤が多くて毎夜苦しめられた。そのかわり、動物
 学で学んだ蚤の幼虫などは、すみ 畳の隅、じゅうたん 絨毯の下などには幾つ
 も幾つもいたものである。私はある時その幼虫と繭と成虫とを丁
 寧に飼つていたことがある。特に雌雄の蚤の生きている有様とか、
 その交尾の有様とかいうものは普通の中等教科書には書いてない
 ので、私は苦心して随分長く飼つて置いたことがある。飼うには
 重曹とか舎利塩などのような広口の瓶の空いたのを利用して、口
 は紙で蔽おおうてそれに針で沢山の穴をあけて置く。また時々血を吸
 わせるには、ふともも 太股のところに瓶の口を当てて置くと蚤が来て血

を吸う。そういうときに交尾状態をも観察し得るので、あの小さい雄の奴がまるで電光の如くに雌に飛びつく。もはや清潔法は完備し、駆虫剤の普及のために蚤族も追々減少して見れば、そういう実験をしようとしても今は困難であるから、私の子どもなどのもうこういうことは知らないでいる。

そうだ、火事のところでいい忘れたが、火事が近くて火の粉の降りかかって来たのが鳥越町に一つあった。また凄^{すご}かったのは神田和泉町の第二医院の火事で、あまりの驚^{きよう}愕^{がく}に看護婦に氣のふれたのがあつて、げらげら笑うのを朋^{ほう}輩^{ばい}が三、四人して連れて来るのを見たことがある。私がそんなに近く見たのはこの一例だけだけれども、そのころの東京の火事にはそんな例がさらにあ

ったものとおもう。

東京は大震災であのような試煉を経たが、私も後年に火難の試煉を経た。少年のとき屋根瓦にかじりついて、紅く燃えあがる吉原の火事を傍看したのとは違って、これはまたひどいともひどくないとも全く言語に絶した世界であつた。私は香港と上海ホンコン シャンハイとの間の船上で私の家の全焼した電報を受取り、苦悩のうちに上海の歌会に出席して人々の楽しそうな歌を閲して批評などを加えつつ、不思議な気持で船房に帰ったことを今おもい出す。

九

私らが浅草を去って神田和泉町それから青山に転任するように
なつてから、私は一度東三筋町の旧宅地を見に行つたことがある。
その時には、門から玄関に至るまで石畳になつていたところに、
もう一棟家が建つて糸の類を商売にする人が住んでいたようであ
つた。しかし堀^{へい}に沿うて路地を入つて行くと井戸もそのままで、
堀の節穴から覗^{のぞ}けば庭も元のままで、その隣の庭もそのままのよ
うで松樹などが堀の上からのぞいていた。その隣の庭というのは
幕府時代の某の屋敷でなかなか立派であつた。

それから、昭和元年ごろ、歳^{としのくれ}晩にも一度見て通つたことが
ある。その時には市区改正の最中で道路が掘りかえされ、震災後
のバラック建^{だて}であるし、殆^{ほとん}ど元のおもかげがなくなつていた。私

は泥^{でいねい}濘の中を拾い歩きして辛うじて佐竹の通に出たのであった。

それからついであつて昭和十一年の一月と十月とに其処をたずねた。蔵前通を行くと、桃太郎団子はさびれてまだ残っていた。そして市区がすっかり改正されて、道路も舗装道になっているし、一月の時には三筋町の通りで羽子^{はね}などを突いているのが幾組もあった。 magari 角が簡易食店で西洋料理などを食べさせるところ。

その隣は茶舗、蝦蟇^{がまぐち}口製造業、ボール^{ぼー}製造業という家並で、そのあたりが私のいた医院のあとであつた。その隣はカバン製造業、洋品店、玩具^{がんぐ}問屋、煙草^{たばこ}店、菓子店というような順序に並んでおり、路地に入つてみると、元庭であつたところにもぎつしり家が建っており、そのあたりの住人も大体替つてしまつていた。その

頃の煙草屋も藥種商も、綿屋も床屋も肉屋も炭屋も皆別な人で元のおもかげがなかった。私の氣持からいえば先ずリツプ・ワン・ウインクルというところであつた。

一月の時には私は鳥越神社にも参拝した。神殿も宝庫も震災後新あらたに建てられたもので、そのころ縁日のあつたあたりとは何となく様子がかわつていた。それから北三筋町の方へも歩いて行つて見た。今は小さい通日も多くなつて、電車通に向いて救世軍の病院が立派に建っている。新堀は見えなくなつてその上を電車の通つたのは前々からであるが、震災後街衢がいくが段々立派になり、電車線路を隔てた栄久町の側には近代茶房ミナトなどという看板も見えているし、浄土宗浄念寺も立派に建こんりゆう立せられているし、ま

た東京市精華尋常小学校は鉄筋宏こうそう壮な建築物として空に聳そびえつつあった。かつて少年私の眼にとまった少女の通っていた学校である。

私の追憶的隨筆は、かくの如くに平凡な私事に終始してあとは何もいうことがない。ただ一事加えたいのは、父が此処に開業している間に、診察の謝礼に賀茂真淵書入かものまぶちかきいれの『古今集』を貰もらった。多分田安家に奉ったものであっただろうとおもうが、佳品の朱で極めて丁寧に書いてあった。出処よも好し、黒川真頼翁まよりの鑑定を経たもので、私が作歌を学ぶようになって以来、私は真淵崇拜であるところから、それを天からの授かり物のように大切にしてい長崎に行った時にもやはり一しよに持って歩いていたほどであったが、

大正十三年暮の火災のとき灰燼かいじんになってしまった。私の書架は貧しくて何も目ぼしいものはなく、辛うじてその真淵書入の『古今集』ぐらいが最上等のものであったのに、それも失うせた。私は東三筋町時代を回顧するごとに、この『古今集』のことを思出して残念がるのであるが、何事も思うとおりに行くものでないと今では諦あきらめている。そして古来書物などのなくなってしまう径路に、こういうふとした事に本づくものがあると知って、それで諦めているようなわけである。

まえにもちよつと触れたが、上京した時私の春機は目ざめかかっていた。いまだ目ざめてはいなかった。今は既に七十の齡よわいを幾つか越したが、やをという女中がいる。私の上京当時はまだ三十幾

つかであつただろう。「東京ではお餅のことをオカチンといいま
す」と私に教えた女中である。その女中が私を、ある夜銭湯に連
れて行つた。そうすると浴場には皆女ばかりいる。年寄りもいる
けれども、綺麗な娘が沢山きれいにいる。私は故知らず胸の躍るような
気持ちになつたようにもおぼえているが、実際はまだそうではな
かつたかも知れない。女ばかりだとおもつたのはこれは女湯であつ
た。後でそのことが分かり、女中は母に叱しかられて私は二たび女湯
に入ることが出来ずにしまった。私はただ一度の女湯入りを追憶
して愛惜あいせきしたこともある。今度もこの随筆から棄すてようか棄て
まいかと迷つたが、棄てるには惜しい甘味がいまだ残っている。

青空文庫情報

底本：「斎藤茂吉随筆集」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年10月16日第1刷発行

2003（平成15）年6月13日第7刷発行

底本の親本：「斎藤茂吉選集 第十一卷」岩波書店

1981（昭和56）年11月1日第1刷発行

初出：「文藝春秋」

1937（昭和12）年1月号

入力：五十嵐仁

校正：門田裕志、小林繁雄

2006年1月13日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

三筋町界限

斎藤茂吉

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>